



村上進通 著

『き びのくに吉備国「農」の風景
——生命産業・人間産業讃歌——』

グローバル化と市場経済の流れが強まるなか、地域の疲弊を嘆く声が強まっている。全国の農協・漁協・森組は地域の維持・活性化に向けて日々地道な努力を続けているが、若い世代の流出による過疎化がなかなか止まらないのが実情だ。こうした流れに歯止めをかけ、人々と地域の絆をもう一度結び直すためには、経済面の施策ばかりではなく、地域の自然・文化・歴史を人々に改めて知らしめ「かけがえのないふるさと」として認識してもらうことが必要ではないだろうか。

そんなことを考えていた時に、本書に出会った。本書は、著者の村上進通氏が故郷の岡山県内を1年かけてくまなく歩き、現場取材して作り上げたもので、岡山県の美しい自然に彩られた農村、農と結びついた地域の祭り、県内各地の農産物、そして農作業の現場から直売所に至るまで、一つ一つの対象が多数の写真をもとに丁寧に解説されている。さらに、「『農』の先達の風景」として岡山県の農地開拓や農業教育に尽力した方々の事績や、「野の祈りの風景～『農』のころ」として農の現場にいまお残る自然への畏敬の念や人々の日常の営みにも温かな目が向けられている。



〈表紙〉

本書を読んで感じるのは、著者のふるさと岡山県への限りない愛情である。これが読み手（たとえば、岡山県出身で都市部で生活する人々）の心に伝わることにより、出身地が「かけがえのないふるさと」として再認識され、冒頭で述べた人々と地域を結び直す絆への大きな一助になるのではないかと思われた。

また、本書に盛り込まれた「『農』のころ」のテーマは、県域を越えて農業の持つ普遍的な価値を示すものと読み取ることができる。このような良質な書物が生まれた背景には、「農業は生命産業・人間産業」と語る著者の農業への熱い思いがあるからこそと感じられた。岡山県ゆかりの方々に限らず、広く一読をお勧めしたい。

——山陽新聞社 2013年6月

定価1,000円（税別） 230頁——

（常務取締役 柳田 茂・やなぎだ しげる）